

長部日出雄の鉛筆

このたび、長部日出雄の姪・村林美智子さんを通じて、真知子夫人から1,080点の長部日出雄関係資料を御寄贈いただいた。当館のほか、長部の母校・弘前高校をはじめ、東京都内や仙台市などの文学館・図書館・学校などに寄贈された資料は、全体で2,000以上に及ぶ。真知子夫人の御厚意と村林さんの熱意・行動力に頭が下がる思いである。

当館への寄贈資料の約7割（708点）が長部の直筆原稿であり、その質と量に圧倒される。長部は自著『醒めて見る夢』に次のようなことを書いている。

「小説」。この世で書かれたありとあらゆる小説の筋書は、たぶんたった一行で要約できる。一人間はどこから来て、どこへ行くのか。

このたび寄贈された直筆原稿の数々は、長部がこの問いに突き動かされ、生涯にわたって続けた〈人間探究の旅〉の記録である。これらの原稿の多くは鉛筆で書かれており、力強く躍動するその筆跡からは、長部の「思い」の一つ一つが伝わってくる。

ところで、寄贈資料の一つに長部愛用の鉛筆がある。それは、何の変哲もない普通の鉛筆であるが、いずれもきれいに削られ先が尖っている。この〈尖った鉛筆〉をモチーフとした作品に自伝的連作『醒めて見る夢』がある。迷宮の街にそびえ立つ「夢見の塔」をめぐる交錯する12の物語。そのラストシーンで、古い異国の街の空に、尖塔を突き立てて並ぶ寺院が描写される。「空から見ると、その特異な建築は、きれいに削って尖らせた鉛筆を何センチかの長さに切って並べたようだ」。12の物語は〈尖った鉛筆〉のイメージに収斂され、前ページの「スポット企画展 新収蔵資料展」で紹介した「夢見の塔」の一節へと続く。そして、次のような表現で締めくくられる。

そうだ、ものを書く人間が、ひとしく胸の奥に秘めている呪文を結びに記して、ひとつの人生の物語を終えることにしよう。この文字が消えないかぎり、ぼくは不死であり不滅だ。

「何の変哲もない普通の鉛筆」は、新収蔵資料展において、作家・長部日出雄のエッセンスを物語る〈逸品〉となった。

（企画研究専門員 櫛引洋一）

資料紹介



館田勝弘編『岩谷山梔子全句集』
私家本 令和5年7月15日

館田勝弘氏は、昭和53年に岩谷山梔子の研究を志し、大谷図書館（京都）に赴き俳誌『懸葵』の調査に取り組んだ。その時、田中雨城子旧蔵の山梔子関係資料を遺族から託され、その後、山梔子と親交のあった桜井安蔵氏から「山梔子が正しく評価されるように、何としても山梔子の全貌を研究してほしい」と言われたことが研究の後押しをした。

桜井氏と出会ってから45年、昨村上梓された本書は、山梔子の全句、句稿、句帖、俳論、解題、年譜などを収録。明治・大正・昭和の激動の時代の中で、創作意欲を燃やし続けた山梔子の「全貌」を後世に伝える一冊となっている。

お知らせ

〈北の文脈文学講座〉第3土曜日（9月のみ第4土曜日）

午後2時～3時

6月15日（土） 岩谷山梔子 愛と旅の句
講師：館田 勝弘（青森県郷土作家研究会代表理事）

7月20日（土） 久藤達郎の演劇
講師：福井 次郎（文筆家）

〈ラウンジのひととき〉第1土曜日 午後2時～3時

6月1日（土） 朗読 青森県の温泉が舞台の作品を読む
出演：語る会

7月6日（土） 太宰治ドラマリーディング公演
～太宰エッセイで季節巡り（掌編特集）～
出演：声優劇団 津軽カタリスト

〈文学忌〉

忌日を含む1週間程度ロビー展示を行います。
忌日は無料開館。午前10時より講話と朗読があります。

5月18日 平田小六 6月3日 佐藤紅緑
6月19日 太宰治 7月23日 葛西善蔵
9月2日 陸羯南

「文学紀行－青森県の名湯」図録販売中！



（税込1,000円）

北の文脈ニュース 第90号

Kitano bunmyaku news

第48回企画展

「文学紀行－青森県の名湯」

会期：令和6年4月1日～令和7年3月21日

温泉に入りて一夜ねむりぬ陸奥の山の下なる入海の音

大正6年8月、歌人・島木赤彦が浅虫温泉を訪れた時の一首である。北国の海の温泉場の風景が〈歌人の眼〉を通して描かれ、余韻が残る。

幸田露伴、田山花袋、若山牧水、竹久夢二……、明治以降、名だたる文人墨客が青森県の温泉地を訪れ、その魅力を詩情豊かな文章に書き綴ってきた。温泉地ならではの風景が〈旅人のまなざし〉で情感豊かに描かれ、日ごろ見慣れた景色が新たな魅力をもって迫ってくる。また、青荷温泉の丹羽洋岳、大鰐温泉の増田手古奈のように温泉地に暮らした文人や、故郷から遠く離れた蕙温泉を終の棲家とした大町桂月のように、〈生活者のまなざし〉で温泉地を描いた詩文にもまた心惹かれるものがある。本展は、県内の温泉地を南津軽や黒石温泉郷、下北半島など大きく7地区に分けて展示。50を超える文学作品、紀行文などを通して、本州最北端・青森県の温泉地の魅力にあらためて迫るものである。

【展示の構成】

南津軽1…大鰐温泉/田山花袋ほか 南津軽2…碓ヶ関温泉/金子光晴ほか

黒石温泉郷…板留温泉、温湯温泉、青荷温泉、温川温泉/若山牧水ほか

岩木山…嶽温泉、湯段温泉、岩木温泉/石坂洋次郎ほか 浅虫温泉…浅虫温泉、馬門温泉/水上勉ほか

八甲田山…酸ヶ湯温泉、田代元湯、蕙温泉/三浦哲郎ほか 下北半島…下風呂温泉、薬研温泉、湯野川温泉、恐山温泉/井上靖ほか

特集「湯けむりの里、文人のまなざし」…増田手古奈と大鰐温泉/丹羽洋岳と青荷温泉/河東碧梧桐と浅虫温泉/大町桂月と蕙温泉

〈黒石温泉郷 板留温泉〉 若山牧水「溪をおもふ」

「雪解水岸にあふれてすゑ霞む浅瀬石川の鱒とりの群」「むら山の峽より見ゆるしらゆきの岩木が峰に霞たなびく」

大正5年3月、若山牧水（明治18年～昭和3年・宮崎県）は、北国への憧れと雑誌『創作』復刊を目指して来青。翌月、板留に丹羽洋岳を訪ね10日余り丹羽客舎に滞在した。雪解けの山峡の温泉場の風景を描写し歌を詠んでいる。

〈下北半島 下風呂温泉〉 井上靖「海峡」

「ああ、湯が滲みて来る。本州の、北の果ての海つばたで、雪降り積る温泉旅館の浴槽に沈んで、俺はいま硫黄の匂いを嗅いでいる。なぜこんなところへ来たのだ。美しい姫の幻影を洗い流すために、俺はやつて来たのだ。」

雑誌編集室の同僚・宏子に失恋した杉原は、知人と下北半島に傷心の旅に出る。井上靖（明治40年～平成3年・北海道）の小説「海峡」の最終章は、冬の海峡を渡るアカエリヒレアシギの鳴き声を、杉原たちが暗闇の空で聴く場面で終わる。

このほか、田山花袋書簡（田山花袋記念文学館蔵）、大町桂月書幅「浴得霊泉」（酸ヶ湯温泉株式会社蔵）をはじめ、各温泉地ゆかりの書籍や直筆資料など約110点を展示する。

企画展記念講演会のお知らせ

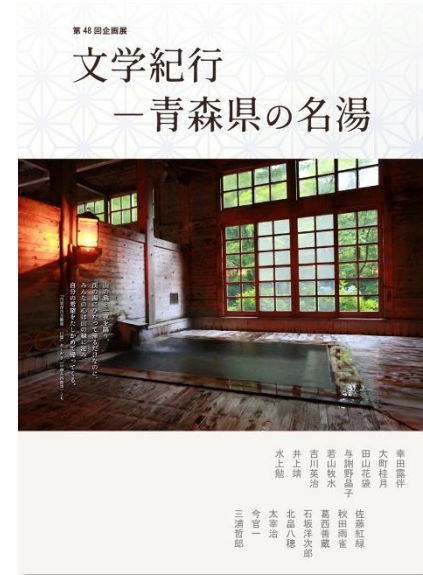
演 題：県民が愛した温泉場～歴史的観点からひもとく～

講 師：中園裕氏（県地域生活文化課 県史担当 総括主幹）

日 時：令和6年8月17日（土）

・お申込みは開催日の7月17日（水）午前9時より開始。日程等は変更になる場合があります。

・詳細は文学館ホームページ・掲示物、広報ひろさきなどでお知らせします。



開催初日の様子

第48回企画展

「文学紀行―青森県の名湯」より資料紹介



「ヤマニ仙遊館宿泊人名簿」

大正11年7月、葛西善蔵の父の葬儀が弘前でわれ、その後、善蔵らは大鰐温泉のヤマニ仙遊館に宿泊。「おやぢの香典」で慰労会を行った。小説「父の葬式」にこのことが記されている。仙遊館の宿帳には、善蔵と弟・勇蔵が大正11年7月18日から一泊した記録が残る。(ヤマニ仙遊館蔵)

下澤木鉢郎・丹羽洋岳特製色紙

昭和41年7月、版画家の下澤木鉢郎が青荷温泉の丹羽洋岳を訪ねた時に、特漉の和紙にランプを写生。それに洋岳の短歌「秋虫の鳴き出る頃にふさわしきほの明りかも夜々の灯影は」が添えられた。この時に同行した郷土文学の研究者・小山内時雄の愛蔵の一品である。(個人蔵)



吉川英治文学碑拓本

吉川英治文学碑は、昭和40年5月16日、温川温泉に建立された。碑の表面には吉川英治の句「ぬる川や湯やら霧やら月見草」が、裏には随想「ぬる川の宿」の一節が刻まれている。吉川は昭和3年9月、温川の溪流のほとりにあった山荘に滞在している。

『鳶温泉帖』『冬籠帖』 私家本 昭和4年7月5日

『鳶温泉帖』は、大町桂月が大正12年10月15日から翌年2月12日まで、恩師・杉浦重剛の伝記を執筆するため鳶温泉で越冬した時に作られ、短歌・漢詩などに戯画を合わせた内容となっている。桂月は、大正13年12月25日から鳶温泉で2度目の越冬。『冬籠帖』には、最晩年の桂月の筆から生まれた作品が収められている。(株式会社城ヶ倉観光鳶温泉蔵)

スポット企画展

新収蔵資料展

会期：令和5年12月2日～令和6年2月29日

弘前市出身の作家・長部日出雄(昭和9年生まれ)が平成30年10月18日に世を去ってから5年目の今年、御遺族から長部にかかわる多数の資料が寄贈され、その中から自伝的連作『醒めて見る夢』、歴史小説『未完反語派』などの長部の直筆原稿と愛用の品を中心に展示した。また、ロビー展では長部日出雄監督作品の映画「夢の祭り」脚本原稿や関連資料を展示した。

小説『醒めて見る夢』は迷宮の街にそびえ立つ夢見の塔をめぐる交錯するさまざまな生の断片。夢現の境界を斬新な手法で描き、物語を綾なす自伝的連作小説。「夢の通路」「小鳥の劇場」「鏡の裏側」「建国の神話」「からくりの城」「故郷へ廻る六部」「影の飛行機」「名前を探しに行く」「遠いスクリーン」「迷宮の出口」「眠るオイディプス」「夢見の塔」の十二の短篇から成る。長部日出雄は原稿を鉛筆で書いた。長部の短篇集『醒めて見る夢』所収の「夢見の塔」の最後に次のような一節がある。「子供のころから長い間ずっと手にしつづけてきたこの鉛筆が、ぼくにとっての城、砦、アジール、逃げ場、隠れ処、避難所、洞窟、望楼、神の憑り代、生命の木、教会、そして夢見の塔であったのか。これと想像力さえあれば、どのような世界だって創り出せる。どんな願いでも、かなえられないことはない。」



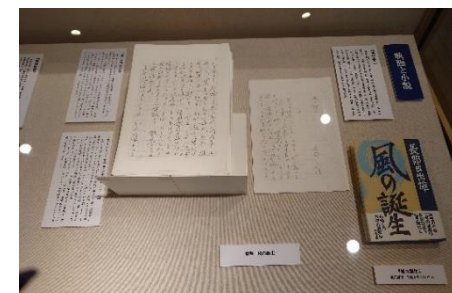
長部日出雄
石場家にて(昭和62年)



遺品 愛用の鉛筆



遺品 愛用の帽子



新収蔵資料展より

スポット企画展

没後80年 岩谷山梔子展

会期：令和6年4月17日～令和6年7月8日

本展では、岩谷山梔子の句稿・句帖・短冊などの直筆資料を中心に展示し、「巧緻洗練」と称された山梔子の俳句の魅力を紹介している。

岩谷山梔子(本名、健治)は、明治15年10月30日、現在の青森市米町に生まれた。青森県第一尋常中学校(現・青森県立弘前高等学校)に進学するが、病気により退学。正岡子規が死去した明治35年、肋胸骨カリエスの療養中に子規の著作を読み、その頃から俳句を始める。翌36年、新聞『日本』の河東碧梧桐選「日本俳句」に初めて選ばれ、以後、碧梧桐の門下で頭角を現し、中央にもその名を知られるようになる。その後、京都に移住、大谷句仏主宰の俳誌『懸葵』に参加し編集や選にも携わる。のちに、大須賀乙字に師事。山梔子は、昭和19年1月4日、宿痼の胃潰瘍で死去するが、亡くなるまで俳句を作り続けた。

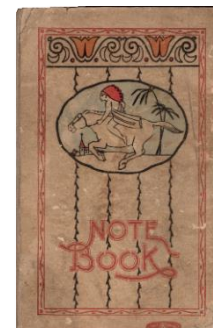
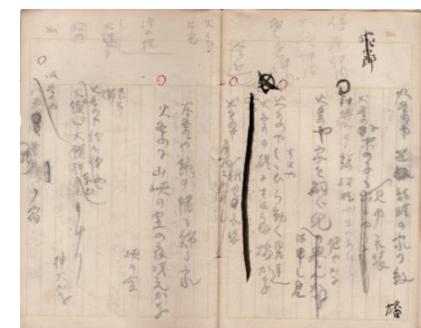
■主な展示資料 句集『山梔子第一句集』『岩谷山梔子全句集』、編著『乙字俳句集』『自選乙字俳論集』『泰山俳句集』(個人蔵)、句稿「句稿ノート」(個人蔵)、句帖「山梔子春夏秋冬」(当館蔵)「山梔子四十詠」「山梔子十二月月」「山梔子俳句帖」「山梔子短冊 二十葉」(弘前大学附属図書館蔵)



岩谷山梔子 大正15年



『山梔子第一句集』紫苑社
大正13年12月25日



「句稿ノート」
山梔子旧蔵の句稿ノート。「大根焚」と「火祭」の句稿が書かれている。
個人蔵